

機関番号：14403
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2007～2010
 課題番号：19720219
 研究課題名（和文） 村落空間の民俗分類体系における世帯差・個人差と経済階層
 研究課題名（英文） Differences in households' and persons' folk classification knowledge of settlement space in relation to their economic class within Japanese villages
 研究代表者
 今里 悟之（IMAZATO SATOSHI）
 大阪教育大学・教育学部・准教授
 研究者番号：90324730

研究成果の概要（和文）：

本研究は、日本の農山漁村の集落空間に関する民俗分類体系（小地名・筆名・方位観など）が、住民の経済階層や性別役割に応じていかに異なるかについて、その世帯差・個人差の実態を明らかにした。あわせて、集落空間に対する住民の意味づけや分類を説明する際の理論的基盤の一つとなり得る、人文主義地理学の理論や視点について根本から再検討し、通説に異議を唱えた。

研究成果の概要（英文）：

This study empirically clarifies differences in households' and persons' folk classification knowledge of settlement space such as minor place names, agricultural plot names, and orientations within Japanese villages. These differences are clarified based on an analysis of each household's economic class and each person's gender. The author also re-examines the common viewpoints of humanistic geography, which can lead to a theoretical basis for studies on spatial folk classification within villages both inside and outside Japan.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
年度			
総計	2,000,000	450,000	2,450,000

研究分野：人文地理学

科研費の分科・細目：人文地理学

キーワード：村落空間，空間分類，民俗分類，小地名，人文主義地理学

1. 研究開始当初の背景

日本の農山漁村を対象として、ある一つの集落空間全体やその内部の様々な場所（例えば田畑・海・神社・墓地など）を、住民が生業や信

仰の観点からどのように意味づけ、分類し、認識しているかという問題は、地理学・民俗学・文化人類学などにおける学際的課題である。

しかしながら、この空間的な民俗分類の知識

体系は、住民全員に共通する部分がありながらも、より細かいレベルで見れば、世帯や個人ごとに異なっていると考えられる。このような民俗分類体系の世帯差あるいは個人差が、土地所有などの集落内部の経済階層とどのように関連しているのかという視点は、これまでの研究ではほとんど皆無であった。

研究代表者は、以上のような研究背景を踏まえ、民俗分類が生業や信仰にもとづいたものである以上、住民内部の経済階層が異なれば、集落空間に対する意味づけや分類の仕方も異なる、という仮説が成り立つと考えるに至った。

他方で、このような集落空間への意味づけや分類について、地理学的視点から理論的に説明し得るような枠組の整備は、未だ不十分であった。研究代表者は、このような理論的枠組の整備と精緻化も必要であると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の2つに大別される。

(1) まず、実証的研究としては、集落空間の民俗分類に関する上述の仮説を、いくつかの事例集落の調査にもとづいて検証することである。すなわち、日本の農山漁村の集落空間に関するさまざまな民俗分類体系(小地名・筆名・方位観など)が、住民の経済階層ごとにいかに異なるか、その世帯差や個人差の実態をできるだけ詳細に明らかにすることである。

(2) 次に、理論的研究としては、集落空間に対する住民の意味づけや分類を説明する際の理論的基盤の一つとなり得る、人文主義地理学の理論や視点について根本から考え直し、その通説の再検討を行うことである。

3. 研究の方法

研究方法は、上述の研究目的に応じて、以下の2つに大別される。

(1) 実証的研究では、まず、観察・聞き取り・地形図・地籍図などをもとに、現在および高度経

済成長期以前における、地割や土地利用をはじめとする村落景観を復原し、住民の生業の場を空間的に把握した。次に、土地所有などを基準として集落内の経済階層を抽出し、各階層から数戸ずつ高齢者をインフォーマントとして選定し、集落内の小地名、耕地一枚ごとの呼称、風の方位、海の潮流といった民俗分類に関する聞き取りを行った。あわせて、市町村役場や集落自治会あるいは個人が保有する文書類の閲覧を行った。

(2) 理論的研究では、人文主義地理学の諸説を再検討するため、英語や日本語の多数の図書や論文について、丹念な読み直しを行い、諸説を整理したうえで独自の解釈を行った。

4. 研究成果

研究成果は、上述の研究目的に応じて、以下の2つに大別される。

(1) 第一は、集落空間の民俗分類に関する実証的研究であり、主に以下の3本の論文を公表した。

① 丹後半島の定置網漁村である京都府伊根町新井を事例として、高度経済成長期以前の生業空間の民俗分類体系(方位観など)と宗教的な場所における、性差と性別分業の実態を明らかにした。女性は主に農業と仏教行事に、また男性は主に漁業と神道行事に携わり、これに応じて分類体系の細分化の区域も異なっていた。新井の女性と男性は、フェミニズム理論で言われる「公的空間」と「私的空間」の双方に関わりをもち、民俗分類体系や宗教上の知識に限れば、男女の関係は相補的であったといえる。本成果は、これまでの地理学や文化人類学において、ほとんど扱われてこなかった民俗分類体系の性差を、具体的な事例に則して示し、理論的にも、従来のフェミニスト地理学・人類学における「公的空間」と「私的空間」という概念区分自体が、高度経済成長期以前の日本の村落社会では適用が難しく、新たな理論枠組の構築が必要であ

ることを指摘したものである。[雑誌論文③]

② 高度経済成長期以前の長野県下諏訪町萩倉と京都府伊根町新井を事例に、耕地一枚ごとの名称である「筆名」の命名基準の実態について比較検討した。両集落では、耕地内外の地物との位置関係にもとづく筆名が最も多かった。各世帯の耕作地が空間的に比較的集中していた萩倉では、道路などの耕地外部の地物を基点とした命名が多く、隣接する各耕地を明瞭に区別するために、植生・地形・地質・水質なども含めた多様な命名基準があった。急傾斜地の狭小な耕地の各小字に、各世帯が1枚程度しか耕作しないことが多かった新井では、小字名がそのまま筆名となる例が多かった。本論文では、筆名の世帯差や個人差の解明までには達しなかったが、国際的にみても研究事例がほとんどない「筆名」の名づけられ方について、基本的な事柄を明らかにした点に意義を見出し得る。[雑誌論文①]

③ 滋賀県野洲市の小南・富波甲・木部各集落の各2世帯・計6世帯を選定し、高度経済成長期以降の圃場整備事業を通じた、筆名の変化を調査した。小南P家では、面積の小さな多数の筆が団地状に集中し、多彩な命名基準の筆名が存在した。整備後に面積値で水田の筆名がほぼ統一されたのも、大きな特徴である。小南X家も、水田所有面積が大きく、整備前後を通じて命名基準が豊富であった。富波甲Q家は、主に小字名を筆名に用い、現在は耕作委託によって筆名はほとんど使用していない。富波甲Y家は、小字名に加え旧小地名も用いていた点などが特色である。木部R家とZ家では、整備前後とも小字名がそのまま筆名になっていた。以上6世帯の命名基準の共通点として、圃場整備前後を通じて、部分全体関係(59例)、空間的隣接(25例)、

示差的特徴(17例)、時間的隣接(9例)という、4つ原理が使われていた点が挙げられる。国内外の小地名研究において、このような命名基準の簡潔な抽象的原理を見出した研究は、ほとんど類例がない。[雑誌論文②]

(2)第二は、人文主義地理学の諸説の再検討に関する理論的研究であり、主に以下の2本の論文(うち1本は図書に収録)を公表した。

① まず、人文主義地理学の代表的な論者であるイーファー・トゥアン、エドワード・レルフ、デヴィッド・レイの所論と、これらの論者が依拠するエトムント・フッサールとアルフレッド・シュッツの現象学について、英語および日本語の多数の著作(図書・論文)を読解した。この際、これらの論者の基本的な概念と視点を再考し、従来の学説の問題点を指摘しながら、人文主義地理学をより厳密に再定義した。すなわち、人間の実存空間やその表象にみる共同主観的秩序への注目、人間の理性と感性における普遍性の探究、内部の人間の視点に立った人文科学的資料や現場調査資料の利用、人間科学の方法論の哲学的反省である。[雑誌論文④]

② 次に、上記の成果を受けて、トゥアン、レルフ、レイの所論について、さらに再検討を行った。具体的には、1)基本的視点、2)実際の研究方法、3)現象学の扱い方、4)人間観(人間らしさをいかに考えるか)、5)科学観(科学に対してどのような立場をとるか)、という5つの視点から、上記の三者の所論を比較検討した。この際、三者への批判論文(書評等を含む)も含めて検討した。その結果、三者の所論には通説とは異なる部分が多く含まれ、これまで誤解あるいは単純化して理解されることの多かった人文主義地理学に

は、実際には大きな違いのある多数の立場が含まれ、各論者が主張する内容も、従来考えられていた以上に多様性に富むことが明らかとなった。[図書①]

人文主義地理学に関する上記の2つの成果は、国内外を通じて従来指摘されていなかった多数の理論的事柄について、具体的に指摘した点で意義をもつ。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- ①今里悟之, 民俗分類としての田畑の筆名—命名の基準と空間単位, 国立歴史民俗博物館研究報告 162, 123-139, 2011, 査読有
- ②今里悟之, 圃場整備を通じた筆名の命名原理変化—滋賀県野洲市の三集落の事例, 人文地理 61, 209-230, 2010, 査読有
- ③Imazato, S. Gender differences in the folk classification of subsistence spaces and religious places in a Japanese fishing village. *Japanese Review of Cultural Anthropology*, 8, 77-100, 2007, 査読有
- ④Imazato, S. Rethinking the humanistic approach in geography: misunderstood essences and Japanese challenges. *Japanese Journal of Human Geography*, 59, 508-532, 2007, 査読有

[学会発表] (計2件)

- ①今里悟之, 一番小さい地名—滋賀県野洲市の田畑の事例から, 兵庫地理学協会 2009年度特別例会, 神戸大学, 2009.5.12
- ②今里悟之, 村落耕地における筆名の民俗分類—命名の基準と空間単位, 人文地理学会第114回歴史地理研究部会, 大阪教育大学, 2009.5.30

[図書] (計1件)

- ①今里悟之, 人文主義地理学における多様性の再検討—トゥアン, レルフ, レイの所論から, 金沢大学文学部地理学教室編『自然・社会・ひと—地理学を学ぶ』古今書院, 299-318, 2009, 査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今里 悟之 (IMAZATO SATOSHI)
大阪教育大学・教育学部・准教授